

● 授業科目の
内容紹介

保

育

専

攻

授業科目名	単位数		学科	年次	担当教員
	必修	選択			
保育内容研究総論		2	保	1	永倉みゆき

I 主題

この科目では附属園に於ける実習を通して、保育を研究的にみる態度を養うことを目的とする。

II 授業の到達目標

1. 自分(達)の保育を見直す態度を養う。
2. 子どもと保育者の関わりについて観察をもとに考察する。
3. 観察したことをもとに保育を創造することができる。

III 授業の概要

各自の研究ノートをもとに考察を行い、グループ及び個人の研究としてまとめる。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. オリエンテーション	授業の進め方について理解する
2. 研究実習テーマの検討	それぞれのテーマを考える
3. 実習で観察したことの発表・検討	“視点”を持って実習し、経過を発表
4. 実習で観察したことの発表・検討	“視点”を持って実習し、経過を発表
5. 実習で観察したことの発表・検討	“視点”を持って実習し、経過を発表
6. 中間発表会に向けて	グループで発表内容をまとめる
7. 中間発表会に向けて	グループで発表内容をまとめる
8. 中間発表会	グループで半期の成果を発表する
9. 責任実習の指導案検討	グループで提案保育の検討
10. 責任実習の指導案検討	グループで提案保育の検討
11. 責任実習の振り返り	実習をもとに振り返りを行う
12. 個人研究のまとめ作成	各自のテーマに沿ってまとめる
13. 個人研究のまとめ作成	各自のテーマに沿ってまとめる
14. 個人研究のまとめ作成	各自のテーマに沿ってまとめる
15. 最終報告発表会	実習での学びの成果を発表する (個人)

まとめ

V 使用テキスト・教材等

必要に応じて指示する。

VI 参考書・参考資料

各自の研究ノート

VII 成績評価の方法及び基準

成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
学習項目					
配点比率(%) 合計 100		40	40	20	
保育を省察し、研究実習を進める態度		○	○	○	
実習での記録をもとにした考察		○	○	○	
観察に基づいた保育の提案		○	○	○	

※小テスト・レポートとは研究ノートを指す。

VIII 授業時間外の学習 (予習・復習等)

実習の記録を研究ノートに書く

IX その他 (履修上の注意、前提条件等)

授業時間以外に、公開保育参観をする場合がある。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
現 代 保 育 者 論		2	保	1	竹石聖子

I 主題

国内外の保育実践を検討し、保育者の専門性について考察する。

II 授業の到達目標

1. テキストの講読と検討を通して、他者の保育の在り方について考察できる。
2. 議論を通して、他者と自己の保育の考え方や方法の違いを考察できる。
3. 自分の目指すべき保育者像を語るができるようになる。

III 授業の概要

共通テキストを読み、グループで検討、発表をおこなっていく。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 保育の「現在」を考える	保育の現状を議論する
2. 「子ども」をみる新しい視点	新しいアプローチ
3. 保育実践を読む (1)	実践記録の検討 (1)
4. 保育実践を読む (2)	実践記録の検討 (2)
5. 保育実践を読む (3)	実践記録の検討 (3)
6. 保育実践を読む (4)	実践記録の検討 (4)
7. 小まとめ	ここまでの総括議論
8. 海外の実践に学ぶ (1)	レッジョ・エミリアの実践
9. 海外の実践に学ぶ (2)	ニュージーランドの実践
10. 小まとめ	ここまでの総括議論
11. 保育者集団と専門性 (1)	実践記録の検討 (1)
12. 保育者集団と専門性 (2)	実践記録の検討 (2)
13. 保育者集団と専門性 (3)	実践記録の検討 (3)
14. 保育者集団と専門性 (4)	実践記録の検討 (4)
15. 保育者の専門性とは	まとめ

V 使用テキスト・教材等

大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房

平松和子『子どもが心のかっとうを超えるとき-発達する保育園子ども編』『大人だってわかってもらえて安心したい-発達する保育園大人編』ひとなる書房

VI 参考書・参考資料

特になし

VII 成績評価の方法及び基準

成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
学習項目					
配点比率(%) 合計 100		40	40	20	
テキストの内容の理解と考察			○	○	
保育実践の理解と考察			○	○	
現代の保育者の課題と展望の考察		○		○	

VIII 授業時間外の学習 (予習・復習等)

テキストをよく読み、問いをもって参加すること

IX その他 (履修上の注意、前提条件等)

発表は責任を持って行うこと。討論に積極的に参加すること。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 学 演 習		(2)	保	1	加藤寿子

I 主題

この授業では、「子育て広場」の実践を通して、子育て支援について考える。

II 授業の到達目標

1. 子育て支援活動の実践から、支援について理解を深める。
2. 子どもや母親とのかかわり、子ども・子育て家庭の思いを学ぶ。
3. 保育者としての役割を考え、実際に支援する力を養う。

III 授業の概要

地域の親子が参加する「子育て広場」の活動を企画・運営し、実践しながら学ぶ。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1～2. 子育て支援とは何か	子育て支援のあり方を考える
3. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場①）
4～5. 保育実践の検討と準備	保育環境を考える
6. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場②）
7～8. 保育実践の検討と準備	支援内容を検討する
9. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場③）
10～11. 保育実践の検討と準備	保護者の支援について考える
12. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場④）
13～14. 保育実践の検討と準備	保護者の支援について考える
15. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場⑤）
16～17. 保育実践の検討と準備	子どもとのかかわりを考える
18. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場⑥）
19～20. 保育実践の検討と準備	子どもとのかかわりを考える
21. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場⑦）
22～23. 保育実践の検討と準備	親子をつなぐ試み
24. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場⑧）
25～26. 保育実践の検討と準備	親子をつなぐ試み
27. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場⑨）
28～29. 保育実践の検討と準備	子育て支援の可能性について
30. 子育て支援の実際	保育実践（子育て広場⑩）

V 使用テキスト・教材等

必要に応じて資料を配布する。

VI 参考書・参考資料

VII 成績評価の方法及び基準

成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 (保育実践)
学習項目					
配点比率(%) 合計 100		20		30	50
子育て支援活動の理解		○		○	○
子ども・子育て家庭の理解		○		○	○
保育者の役割の理解		○		○	○

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

保育実践に必要な準備を、各自責任を持って行うこと。

IX その他（参考文献、履修上の注意等）

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
幼 児 体 育 演 習		(2)	保	1	藤田庄治

I 主題

この授業では、幼児の運動遊びに携わる保育者が保育現場でプログラムを立案し、実践できるために必要な基本的な知識や技能を習得する。

II 授業の到達目標

1. 子どもの心身の発育発達と現況を踏まえた体育教育の在り方を考察する
2. 保育としての体育プログラムを考案することができる
3. 段階指導及び展開方法を学び、指導技術及び技能を身につける

III 授業の概要

この授業は、幼児体育の現状と在り方について考えながら演習を中心に展開。総合指導としての体育教育を理解し、指導できる保育者を目指す。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 講義 1	オリエンテーション・幼児の体育教育の現状について
2. 講義 2	幼児の体育教育の在り方について
3. 演習 1	マットあそびの段階指導及び展開方法①/「どんぐり山で遊ぼう」
4. 演習 2	マットあそびの段階指導及び展開方法②/「桃太郎」
5. 演習 3	とび箱あそびの段階指導及び展開方法①/「お馬の親子」
6. 演習 4	ボールあそびの段階指導及び展開方法①/「ボールで遊ぼう」
7. 演習 5	なわあそびの段階指導及び展開方法①/「へび島冒険」
8. 演習 6	なわあそびの段階指導及び展開方法②/「なわで遊ぼう」
9. 実習 1	各種目の補助法・安全対策①/課題練習
10. 実習 2	各種目の補助法・安全対策②/課題練習
11. まとめ 1	実技課題の練習成果を発表する
12. 演習 7	ニューゲーム
13. 実習 4	指導実習案を作成
14. まとめ 2	グループディスカッション「幼児の体育教育の在り方」
15. まとめ 3	これまでの内容を振り返る（レポート作成）

V 使用テキスト・教材等

「幼児の運動あそび」著者/藤田庄治の研究資料をテキストとして使用。

VI 参考書・参考資料

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100		30	20	25	35	
幼児期における体育教育の重要性と意義		○	○		○	
段階指導法及び展開方法の理解		○	○		○	
演習における運動種目の習得				○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

ジャンル別レポーター表作成及び課題練習すること。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

履修上の注意： 演習時においては、運動のできる服装(ジャージ・体育館シューズ)・筆記用具

授 業 科 目 名	単 位 数		学 科	年 次	担 当 教 員
	必修	選択			
発 達 心 理 学 特 論	4		保	1	大 村 壮

I 主題

この授業では、発達理論や先行研究の知見を学び、発達を理解することが目的である。

II 授業の到達目標

1. 発達心理学研究を輪読し発達についての理解を深める。
2. レジュメを担当し、自分の理解を受講者たちと共有する。
3. どのような援助やケアが可能であるのかについて考える。

III 授業の概要

教員を含めた文献輪読を通して、発達理論や先行研究の知見を学び、発達を理解する。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. イントロ、報告順の決定	報告者の決定、レジュメ作成方法の指示
2～7. 文献輪読と報告 I	レジュメの報告と討論
8. 疑問を整理する	文献に関する疑問を検討し整理する
9～14. 文献輪読と報告 II	レジュメの報告と討論
15. 全体をまとめる	他の文献も含め、まとめる
16～18. 発達心理学研究を学ぶ I	幼児期の遊びに関する研究論文の輪読
19～21. 発達心理学研究を学ぶ II	幼児期の言語発達に関する研究論文の輪読
22～24. 発達心理学研究を学ぶ III	幼児期の人間関係に関する研究論文の輪読
25～27. 発達心理学研究を学ぶ IV	子ども虐待に関する研究論文の輪読
28～30. 発達心理学研究を学ぶ V	発達障害に関する研究論文の輪読

V 使用テキスト・教材等

- A.ゴブニック 2010 哲学する赤ちゃん 亜紀書房
 浜田寿美男 2009 障害と子どもたちの生きるかたち 岩波書店
 板倉昭二 2007 心を発見する心の発達 京都大学出版会
 白石正久 1994・1996 発達の扉[上・下] かもがわ出版
 遠藤利彦ほか 2011 乳幼児のこころ 有斐閣
 木下孝司 2010 子どもの発達に共感するとき 全国障害者問題研究会出版部

VI 参考書・参考資料

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
	配点比率(%) 合計 100			40		60
発達に対する考察			○		○	
援助・ケアに対する考察			○		○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

レポーター以外も自分の意見を言えるように、必ず文献を読んで授業に参加すること。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

この授業は、年間を通して学生と教員が共同して作っていく授業です。学生の積極的な参加を期待します。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
特 別 支 援 教 育 論		2	保	2	橋田憲司

I 主題

この授業では、特別支援教育について概観し、幼稚園等における推進上の必須事項を学ぶ。

II 授業の到達目標

1. 特別支援教育の意義と現状、推進のための仕組みや役割を理解する。
2. 子どもの特性に即した配慮や支援の在り方について実践的な知識を得る。
3. 「個別の指導計画・移行支援計画」の作成について学び、応用できるようにする。

III 授業の概要

特別支援教育は、幼・小・中・高校等のすべての教師によって推進され、障害のある子どもを含む保育・教育の質的向上を目指すものである。授業では、特別支援教育を支える理念や推進の仕組みなどの基本的な理解を図るとともに、障害のある子どもの理解と指導・支援の在り方、保護者や関係機関との連携、個別の指導計画の作成などについて基礎的な知識を習得する。

IV 授業計画と内容

授業は、講義を中心とするが、具体事例を扱うとともにグループ討論を取り入れる。

項 目	内 容
1. 特別支援教育への転換	特別支援教育への流れと発達障害などの実態
2. 特別支援教育の意義	基本的な考え方と通常の保育や教育との共通性
3. 現行の仕組みと現状	我が国の特別支援教育の現行制度と実際
4. 園内外の支援組織	園内委員会やコーディネーター、巡回相談など推進の仕組み
5. 障害の理解	WHOの「ICF」など現在の障害観
6. 気づきと支援の在り方	①落ち着きのない子や集団行動のできない子
7. (具体的事例をもとに	②こだわりが強い子やコミュニケーションがうまくとれない子
8. グループ討論)	③知的な発達に遅れがある子
9.	④手足が不自由な子や不器用な子
10.	⑤視覚や聴覚に障害がある子やことばに障害のある子
11. 「個別の指導計画」の実際	①「個別の計画」作成の意義と作成の手順
12.	②グループワークによる作成演習
13. 保護者や関係機関との連携	連携・協力と「サポートファイル」や「個別の支援計画」の活用
14. 就学支援	小学校等との連携と支援をつなぐための「移行支援計画」
15. 統合保育や交流	統合保育や交流活動とインクルーシブ教育システムの構築
定期試験	授業で扱った重要事項を中心に出題し、講義内容の理解度を把握する。

V 使用テキスト・教材等

テキストは使用しない。資料を配布したり、学習文献を提示したりする。

VI 参考書・参考資料

『はじめての特別支援教育』 柘植・渡部・二宮・納富編 有斐閣

『特別支援学校幼稚部教育要領』 文部科学省 海文堂出版

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法				
	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100	30	40		30	
特別支援教育の意義や仕組み等の理解	○	○		○	
障害の理解と実践的知識の習得	○	○		○	
個別の指導計画等の作成		○		○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

講義やグループワークの中で必要となる事項を調べたり、レポートを作成したりする。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

事例検討やグループ討論を行った際はレポートを課す。また、授業への貢献度を評価するので、積極的な参加を期待する。

授 業 科 目 名	単 位 数		学 科	年 次	担 当 教 員
	必修	選択			
社 会 福 祉 学 特 論	2		保	1	大塚隆雄

I 主題

本科で学んだ社会福祉に関する知識を基に、児童の社会的養護のあり方、新たな仕組みについて考え、これからの方向と保育者のあり方を学ぶ。

II 授業の到達目標

1. 児童虐待を背景にしたリスクのある家庭への支援の現状を把握する。
2. 家庭支援計画の策定と自立支援について習熟する。
3. 社会的養護のこれからの方向と保育者のあり方を学ぶ。

III 授業の概要

15回の講義や演習を通して、現行の社会的養護の仕組みについて資料等を活用しながら検証し、課題と新たな子ども達の生活環境整備について考える。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1-2. リスクのある家庭支援	虐待を背景にした家庭支援が社会的養護の中心になってきた。危機介入と家庭支援の現状と課題を探る。
3-4. ファーストノックの受け入れ	リスクのある家庭からの相談受け入れ体制の現状と課題を探る。
5-7. リスクのある家庭支援計画の作成	児童を中心に親子関係の再構築を目指しPlan-Do-Seeのあり方を学ぶ
8-10. 社会的養護に関する関係機関の連携	行政機関を中心に子ども達の生活環境に関わる様々な機関の現状と連携のあり方を探る。
11-13. リスクのある家庭の自立支援	家庭が社会的養護から脱して子育てするパーマネンシーを獲得する支援のあり方を考える。
14. 新たな社会的養護の仕組み	1～13回の講義・演習を踏まえ、子どもの最善の利益にかなう生活環境について考える。
15. まとめ	

V 使用テキスト・教材等

プリント

VI 参考書・参考資料

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100		60	10		30	
社会的養護の現状と課題		○	○		○	
リスクのある家庭支援計画		○	○		○	
関係機関の連携		○	○		○	
リスクのある家庭の自立支援		○	○		○	
新たな社会的養護の仕組み		○	○		○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

課題について各自で資料収集・分析をしておくこと。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
家 族 支 援 演 習		(1)	保	2	土屋廣人

I 主題

この授業では、家族支援の必要性を理解し、実践力を身に付ける

II 授業の到達目標

1. 家族支援としての社会福祉制度・関係機関の役割を理解する。
2. 家族を支援する際の面接スキルを理解し、身に付ける。
3. それぞれの家族のニーズに応じた多様な支援策の必要性を理解する。

III 授業の概要

演習を中心として、授業項目ごとに検討・発表を行い、知識・技術を学習する。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 家族支援とは、面接スキルの前に	児童福祉、家族関係
2. 家族支援の必要性、相談とは	困難・喪失的体験時の心の動き
3. 保育所の社会的責任	保育と家族支援
4. 子育て家庭の諸問題	家族形態の変化、ライフスタイル
5. 家族支援制度	自分の街の家族支援制度
6. 家族支援制度	対象児ごとの支援制度
7. 児童福祉関係機関とその連携	各児童福祉機関の役割と連携
8. 事例検討の方法	効果的な事例検討の方法
9. 事例検討の方法	効果的な事例検討の方法
10. 面接スキル（雰囲気づくり）	ねぎらい、イエスセット
11. 面接スキル（明確化）	明確化 焦点化、感想 支持
12. 面接スキル（援助の3段階）	リフレーム、解釈
13. 保育者の具体的援助活動	事例検討
14. 保育者の具体的援助活動	事例検討
15. まとめ	これまでの授業のまとめ

V 使用テキスト・教材等

テキストは使用しない。必要によりプリントを提示する。

VI 参考書・参考資料

児童家庭福祉・児童心理関係の教科書を参考とする。

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100			60	20	20	
家族支援制度の必要性と施作の理解			○	○	○	
面接スキルの修得			○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

家族支援制度や関係機関の役割等の基本的なことを復習しておくこと。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

主体的な授業参加態度が求められる。

授 業 科 目 名	単 位 数		学 科	年 次	担 当 教 員
	必修	選択			
子 育 て 支 援 論		2	保	1	加藤寿子

I 主 題

この授業では、多様化する子育て支援活動の現状を理解し支援について考える。

II 授業の到達目標

1. 子育て支援活動の現状を理解する。
2. さまざまな角度から子どもや家庭について理解する力を養う。
3. 保育者としての役割を考え、子育て支援活動に対する理解を深める。

III 授業の概要

子育て支援の基本的な考え方について、各自でまとめたものを発表し、意見を出し合いながら検討していく。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 子育て支援とは	子育て支援の動き
2. 子どもの育ちの変化	現代の子育て環境を学ぶ
3. 現代の子育て家庭の状況	子育て家庭の現状を知る
4. 子育てを取り巻く社会と環境	子どもと社会の関係
5. 子育て支援の多様性	さまざまな子育て支援活動
6. 子育て支援の視点	子育て支援の5つの視点
7. 保育の場における子育て支援	保育の中での支援とは何か
8. 親子関係への支援	親子の関係を考える
9. 園と家庭との連携	家庭に対する支援
10. 多様な保育サービス	保育サービスの現状
11. 保育の場における地域子育て支援	支援活動の実践から考える
12. ひろば型子育て支援施設の意義	支援活動の実践から考える
13. 子育て広場の取り組み	支援活動の実践から考える
14. 子育て支援の課題	これからの可能性について
15. まとめ	保育者としての支援とは何か

V 使用テキスト・教材等

無藤隆・安藤智子編著 「子育て支援の心理学」 有斐閣コンパクト

VI 参考書・参考資料

VII 成績評価方法及び配点比率

成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
学習項目					
配点比率(%) 合計 100		20	50	30	
子育て支援活動の理解		○	○	○	
子ども・子育て家庭の理解		○	○	○	
保育者の役割の理解		○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前に読み、自分で課題を持って授業に参加すること。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
子 育 て 支 援 演 習 I		(1)	保	1	太田嶋信之

I 主題

子ども子育て支援の現代的意義・使命・役割を理解し専門性と質の向上を図る。

II 授業の到達目標

1. 子育て支援の歴史的背景、使命、役割、必要性について理解する
2. 保育現場における子育て支援活動を体験し、実践力、スキルを習得する
3. 社会的養護を必要とする支援など新たな課題、専門性について研究する

III 授業の概要

子育て支援の意義、使命、役割、具体例等について講義。保育現場での実践体験

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 子育て支援の歴史的背景、意義	役割・使命と新たなシステム（講義）
2. 子育て支援への取り組みの実際 I	取り組み内容①（講義）
3. 保育所での実践体験①	計画、準備、参加等の現場実践
4. 保育所での実践体験②	//
5. 保育所での実践体験③	//
6. 保育所での実践体験④	//
7. 子育て支援への取り組みの実際 II	取り組み内容②（講義）
8. 子育て支援に関するニーズ理解	子どもを取り巻く現状理解（講義）
9. 保育所での実践体験⑤	計画、準備、参加等の現場実践
10. 保育所での実践体験⑥	//
11. 保育士に求められる役割と資質	保育士の役割、資質、専門性（講義）
12. 課題と展望	問題点、課題、展望
13. 保育所での実践体験⑦	計画、準備、参加等の現場実践
14. 保育所での実践体験⑧	//
15. まとめ	講義と討議

定期試験 レポート作成

V 使用テキスト・教材等

保育所保育指針 ②プリントを講師が用意

VI 参考書・参考資料

必要に応じて講師がプリントを用意

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他（実習）
	配点比率(%) 合計 100		50	10		20
子育て支援の意義,具体例,課題,展望		○			○	
子育て相談者,援助者としての事例研究			○		○	
体験活動を通じた観察力,実践力					○	○

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

実践体験についての自己評価、感想をレポートにまとめ次回に提出

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

毎回、保育所保育指針を持参

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
子 育 て 支 援 演 習 II		(1)	保	2	鈴木久美子

I 主題

この授業では、地域における多様な子育て支援活動に積極的に参加し、子育て支援への理解・関心を深化させることを目指す。

II 授業の到達目標

1. 子育て支援の多様性を整理することで、子育て支援への理解を深める。
2. 地域における様々な子育て支援に参加して、支援のあり方について考察できる。
3. さらに、子育て支援の知識を利用して、自分たちが考える子育て支援を企画・運営することで、自らが実践者として何が出来るのか、何をしたいのかを深く考察できるようになる。

III 授業の概要

実践的な子育て支援活動に積極的に参加し、多様な人々と出会い関わり、各人の考察をもとに理解を深める。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 子育て支援とはなにか	子育て支援の多様性を理解する
2. 地域の子育て支援を知る	どのような場や機関があるかを知る
3～4. 多様な子育て支援(1)	行政による子育て支援の内容を知り、その活動を見学し、参加する
5～6. 多様な子育て支援(2)	行政以外の子育て支援の内容を知り、その活動を見学し、参加する
7～8. 保護者の子育てネットワーク	障がい児をもつ家庭のネットワーク活動に参加し、保護者と子どもと関わる
9～13. 子育て支援活動の企画・運営	子育て支援活動を企画・運営する
14～15. 自由討議	子育て支援をめぐる問題の整理とディベートの実施
定期試験	レポート

V 使用テキスト・教材等

テキストは使用しない。必要に応じて資料を配布する。

VI 参考書・参考資料

授業内に適宜、紹介する。

VII 成績評価方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100		50	10	20	20	
子育て支援についての理解と考察		○	○	○	○	
子育て支援活動への参加とその姿勢				○	○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

活動参加記録を作成すること。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

主体的な参加ができない場合は、出席を認めないこともある。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
子 育 て 支 援 演 習 III		(1)	保	2	遠藤知里

I 主題

子育て支援演習Ⅰ、Ⅱでの学習を踏まえて、子育て支援の場づくりに必要とされる援助技法およびマネジメント方法を実践的に学ぶ。

II 授業の到達目標

1. 子育て支援事業の企画から評価までの方法を理解する。
2. 人が集まる「場」づくりに必要なマネジメント力を身につける。
3. 人が集まる「場」づくりに必要なファシリテーション力を身につける

III 授業の概要

「仲間を巻き込む」「人と人とをつなぐ」ことを、事業の企画・運営・評価の実践を通して学ぶ。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 「場」を創るとは？	思いを形にすること
2. 企画の基本	人・時・金・コンセプト 5W1H
3. マネジメントの実際	広報 参加者募集
4. マネジメントの実際	リスクマネジメント 保険
5. マネジメントの実際	「資源」を活かす 資金調達
6. ファシリテーション・トレーニング	お互いを尊重する環境
7. ファシリテーション・トレーニング	グループの発達段階
8. ファシリテーション・トレーニング	ふりかえり
9. 子育て支援活動の企画と実践	親子の自然体験プログラム
10. 子育て支援活動の企画と実践	親子の自然体験プログラム
11. 子育て支援活動の企画と実践	親子の自然体験プログラム
12. 子育て支援活動の企画と実践	親子の自然体験プログラム
13. 子育て支援活動の企画と実践	親子の自然体験プログラム
14. 子育て支援活動の企画と実践	親子の自然体験プログラム
15. 評価 まとめ	全体のまとめ

V 使用テキスト・教材等

教科書は使用しない。

VI 参考書・参考資料

必要に応じて資料を配付。

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	企画運営の実践	出席状況・授業態度	その他 ()
	配点比率(%) 合計 100		0	25	25	50
事業の方法理解(企画と評価)			○	○	○	
マネジメント力を身につける				○	○	
ファシリテーション力を身につける				○	○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

日頃から多様な子育て支援の場に関心を持ち、情報収集を行う。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

長期休業中または週末等にまとめて実施することがあるので、その際は各人の予定の調整を求めます。

授業科目名	単位数		学科	年次	担当教員
	必修	選択			
幼児音楽		(2)	保	1	宮下友美恵

I 主題

この授業では、幼児の発達に応じた音楽の指導方法について学ぶ

II 授業の到達目標

1. 幼児の音楽教材について学び、発達に応じた教材を選ぶことができるようになる
2. 幼児に対する音楽の指導法を理解し、適切な指導ができるようになる
3. さらに、伴奏の工夫や、編曲、遊び歌の創作ができるようになる

III 授業の概要

幼児にふさわしい音楽教材を選択し、実際の保育現場における適切な指導法について考察する。

IV 授業計画と内容

項目	内容
1. オリエンテーション	授業の内容と進め方について
2. ～5. 歌の指導	歌唱教材と指導法についての理解
6. ～7. 伴奏法	幼児の歌唱における効果的な伴奏の理解
8. ～9. 遊び歌の指導	遊び歌の教材と指導法についての理解
10. ～13. 遊び歌の創作	遊び歌を作詞・作曲する
14. ～15. 楽器奏法	楽器の奏法についての理解
16. ～21. 器楽合奏の指導	器楽合奏の指導と編曲についての理解
22. ～27. オペレッタの指導	オペレッタ教材と指導についての理解
28. ～30. 音遊び	音遊びの指導
30. まとめ	これまでの内容のまとめ

V 使用テキスト・教材等

常葉学園短期大学幼児音楽研究会 編 幼児音楽資料集『子どもの歌』

小林美実 編 『続 こどものうた 200』チャイルド本社

その他、必要な補助教材は、プリント配布する。

VI 参考書・参考資料等

VII 成績評価方法及び配点比率

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他(実技)
配点比率(%)	合計 100			40	30	30
歌唱教材の理解と指導					○	○
遊び歌の指導と創作				○	○	○
器楽合奏の指導と編曲				○	○	○
オペレッタ教材の理解と指導				○	○	○
音遊びに対する理解と指導				○	○	○

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

歌唱教材やピアノ伴奏の予習

授業で学習した内容についての復習

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
図 画 工 作 演 習		(2)	保	2	稲葉昌代

I 主題

この授業では、保育者として造形の指導法を学ぶと共に、美術的資質を高めることにある。

II 授業の到達目標

1. 子どもの造形教育の意義を学ぶことができる。
2. 様々な造形作品を通して造形指導の在り方を学ぶことができる。
3. 先人の築いた文化遺産からその思想や技術を学び、作品制作を通して美術的資質を高めることができる。

III 授業の概要

さまざまな造形表現に触れ、現場での実践力が身につくよう演習を通して学んでいく。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. オリエンテーション	授業の内容と進め方について理解する。
2～4. 幼児造形作品の意義	造形美術教育の今日的課題を踏まえ、幼児作品の持つ意味を考える。(レポート・発表)
5～7. 造形指導 I	ねむの木学園授業参観を通し指導のあり方を学ぶ。 (※ねむの木美術館の鑑賞)
8～15. 行事と造形	行事の意味をふまえ、子どもと楽しむ造形活動を実践する。(※附属幼稚園七夕祭りに参加)
16～22. 子どものための文字絵制作	文字絵とは何か、その歴史的背景を探り、子どものための文字絵を制作する。 (※芹澤銈介美術館の鑑賞)
23～26. 渋紙を用いた作品制作	伊勢型紙彫刻技法を理解し、渋紙を用いて作品を作る。
27～30. 造形指導 II	愛護ギャラリー展を鑑賞し、特に表現素材の活用を学ぶ。(レポート・発表)

V 使用テキスト・教材等

テキストは特に使用しない。必要に応じてプリントを配布する。

VI 参考書・参考資料

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度
配点比率(%) 合計 100			30	30	40
造形教育の意義についての理解			○	○	○
造形教育の指導の理解			○	○	○
美術的知識・技能				○	○

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

幼児作品展・美術館での鑑賞、附属幼稚園での制作

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
児 童 文 化		2	保	2	久保田道子

I 主題

幼児期や児童期の発達の段階を理論的に考察し、文化活動の指導のあり方を探求する。

II 授業の到達目標

- 1.教科書講読をとおして幼児期や児童期の発達の段階を理解する。
- 2.観察、交流、実習など体験に基づいた理論や実践力を習得する。
- 3.幼児教育と小学校低学年教育とのつながりを理解する。

III 授業の概要

幼児期に続く児童期の特徴を学ぶ。理論を学ぶだけでなく、小学校をはじめ、いろいろな場での観察、交流、体験をすることで、子供にとって大切なものはなにかを探っていく。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1 オリエンテーション	授業内容の紹介、すすめかた
2～5 教科書講読	児童期の心の発達と特徴
6～7 現代の子供の把握	子供観察と新聞記事をとおして
8～9 「生活科」のねらいと内容	指導要領、自分の生活か体験から
10～11 小学校の教室訪問	授業参観、子供との交流
12～13 夏期保育セミナーへの参加	講演、パネルディスカッションを聞く
14～16 障がいを持つ人との交流	訪問、聞き取り、考察
17～18 科学館「るくる」見学	科学的な体験と考察
19～20 学校訪問	生活科の授業参観
21～25 絵本とこども	市立中央図書館の絵本コーナーを見学し、絵本の読み聞かせ会に参加する。自分達で絵本の読み聞かせ会を開く
26～28 遊びの学校	手遊び、伝統的な遊びを学ぶ
29～30 まとめ	幼、保、小の連携で大切にしたいこと

V 使用テキスト・教材等

「揺れる子どもの心と発達」 高垣忠一郎著 かもがわ出版

「生活科指導要領解説編」 文科省

VI 参考書・参考資料

「学力を育てる」 行田稔彦著 旬報社 「幼稚園教育要領解説」 文科省

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%)	合計 100		50	30	20	
幼児期、児童期発達の理解			○	○	○	
子どもの状況の把握と理解			○	○	○	
訪問体験、実践、発表			○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストを事前に読んでおくこと。絵本を広く読んでおくこと。
新聞やインターネット等で子供の状況の把握につとめること。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

訪問活動、校外での観察・交流活動を重視する。必ず参加すること。

授 業 科 目 名	単 位 数		学 科	年 次	担 当 教 員
	必修	選択			
音 楽 理 論		2	保	1	河原田 潤

I 主題

音楽に関する理論や知識を、さらに豊かなものにして、応用力を付ける。

II 授業の到達目標

1. これまでに習得してきた、音楽表現の知識と技術が保育現場でより活用できるようにする。
2. 具体的な音楽用語等への理解を深め、ソルフェージュ力の向上を目指す。
3. 自らの弱点を克服することにより、音楽表現になお一層の興味を示せるようにする。

III 授業の概要

基礎的・基本的な音楽理論力の向上を目指す。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1～5. 音楽理論の基礎を学ぶ	音符について。 音階と音程について。 拍子について。 三和音とは。 様々な音楽用語と音楽記号について。
6～7 基礎的な和声学	保育者として必要な程度の和声を学ぶ。
8～12. コードネームとコード進行	様々なコードネームを学び、それらを組み合わせ合わせて楽譜を読み取り、自分なりに伴奏付けが出来るようにする。
13～14. 音楽理論の知識と技術の確認	お互いに伴奏し合い、保育現場に必要な実践的な知識と技術を確認する。
15. まとめ	

V 使用テキスト・教材等

「ミッキーといっしょ はじめての楽典ブック」

「ミッキーといっしょ はじめての楽典ワークブック」 ※本科1年生時で使ったもので可。

「音楽理論ワークブック」(ドレミ楽譜出版社) ※新規購入のこと。

※必要に応じプリントを配付

VI 参考書・参考資料

特になし

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法				
	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他()
配点比率(%) 合計 100		50		50	
音楽表現の知識と技術を深める		○		○	
ソルフェージュ力の向上を目指す		○		○	
音楽表現になお一層の興味を示す		○		○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

音楽理論を深く知ることは今後の自分を豊かにし、楽にする。よって常に楽譜に親しむこと。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

楽譜やコピー等を粗末に扱わないこと。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
絵 画		(1)	保	1	小倉 隆

I 主題

この授業では、絵画表現に関する知識や技能を習得するとともに保育士・幼稚園教諭に必要な絵画知識と支援のあり方を学ぶ。

II 授業の到達目標

1. 絵画表現に関する知識・技能を習得することができる。
2. 多様な表現方法を学び、その特性を生かした子どもの支援・指導ができる。
3. 子どもの表現や美術の基礎的・基本的な理解や見方を広げ、よさや美しさなどを味わうことができる。

III 授業の概要

主として演習を通して造形表現の基礎的・基本的な知識・技能を習得する。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. オリエンテーション	授業の内容説明
2. 絵とのかかわり確かめる	自分と絵のかかわり確かめる
3. 絵とのかかわり確かめる	思い出にある絵を紹介する
4. 美術館で作品を鑑賞する	美術作品を鑑賞する
5. 美術館で作品を鑑賞する	美術館を味わう
6. 美術館で作品を鑑賞する	美術作品と美術館について考察する
7. 画家と作品	美術史を学ぶ
8. 描画を確かめる	描画方法を確かめる
9. 描画を味わう 1	身近で素朴な描画 1
10. 描画を味わう 2	身近で素朴な表し方 2
11. 描画を味わう 3	身近で素朴な表し方 2
12. 共同制作を体験する 1	グループ制作の計画と実践
13. 共同制作を体験する 2	グループ制作の実践
14. 絵画と展示	展示のしかたを考察する
15. 作品発表と展示・授業のまとめ	授業のまとめ

V 使用テキスト・教材等

必要な用具は各自で準備する。

VI 参考書・参考資料

必要な資料は配布する。

VII 成績評価の方法及び基準

以下の配点比率は欠席時数が授業回数の1/3を超えない者に限る

学習項目	成績評価方法		試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
	試験	レポート					
配点比率(%) 合計 100				30	30	40	
絵画表現についての知識・技能				○	○	○	
特性を生かした支援・指導の理解				○	○	○	
子どもの表現や美術への理解を深める				○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

授業で使う材料・持物の事前準備。

レポートの提出に備え、各授業の内容を確実にまとめておく。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

授業に必要な用具と材料は、各自が事前に準備する。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 学 特 論	4		保	1	永倉みゆき

I 主題

子どもの行為を記録しそれについて省察することは、保育者にとって欠かせないことである。ここでは、研究実習での子どもの記録を取る上での参加観察の仕方、見方を学んだ上で、記録を元に子ども理解について学んでいく。

II 授業の到達目標

1. 観察記録から、子どもの行為を分析・考察することができる。
2. 子どもを多面的に捉え、理解することができる。
3. 文献購読を通して、より子ども理解についての考えを深めることができる。

III 授業の概要

研究実習の記録の検討と文献購読を並行しながら子ども理解について学ぶ。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. オリエンテーション	授業の進め方について
2. 保育者にとっての観察とは	保育者が子どもを“見る”こととは
3～14 文献購読と実習レポートによる討論①	文献を分担して読み進めるのと並行し実際の研究実習のエピソードより各自の考えを発表し合う。
15. 前期の学びのまとめ	前期のまとめのレポート作成
16～20 責任実習の指導案検討	前期の学びを活かして指導案を検討する
21～29 文献購読と実習レポートによる討論①	文献を分担して読み進めるのと並行し実際の研究実習のエピソードより各自の考えを発表し合う。
30. 学びのまとめ	まとめのレポート作成

V 使用テキスト・教材等

前期：河邊貴子『遊びを中心とした保育』（萌文書林）
後期：小川博久『保育援助論』（萌文書林）

VI 参考書・参考資料

特になし

VII 成績評価の方法及び基準

成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
学習項目					
配点比率(%) 合計 100		50	30	20	
観察記録の分析・考察ができる		○		○	
子どもを多面的に見ることができる		○		○	
観察・文献に関するまとめと発表		○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

本科における実習日誌・指導案を見直しておくこと。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

授業には、自分の考えを持って意欲的に参加すること。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
教 育 心 理 学 特 論		2	保	1	土屋廣人

I 主題

この授業では乳幼児期の発達を教育心理学の視点で学ぶ。

II 授業の到達目標

1. 発達過程及び変化の指標について理解する。
2. 変化の指標に沿った行動について考察する。
3. 乳幼児期の発達が児童期以降に与える影響について理解する。

III 授業の概要

乳幼児の発達と教育に関する学習文献を自らまとめ、意見交換する。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 発達と教育 1	発達と教育の関係を学ぶ
2. 発達と教育 2	発達過程・変化の指標を学ぶ
3. 乳幼児期の発達と教育 1	0歳児の教育について学ぶ
4. 乳幼児期の発達と教育 2	1歳児の教育について学ぶ
5. 乳幼児期の発達と教育 3	2歳児の教育について学ぶ
6. 乳幼児期の発達と教育 4	3歳児の教育について学ぶ
7. 乳幼児期の発達と教育 5	4歳児の教育について学ぶ
8. 乳幼児期の発達と教育 6	5歳児の教育について学ぶ
9. 発達課題と教育 1	発達課題と虐待の影響について学ぶ
10. 発達課題と教育 2	社会適応と発達課題の関係について学ぶ
11. 発達課題と教育 3	不適応児童への対応について学ぶ
12. 障害児の発達と教育 1	障害児の発達について学ぶ
13. 障害児の発達と教育 2	治療理論について学ぶ
14. 障害児の発達と教育 3	保護者支援について学ぶ
15. まとめ	これまでの授業をまとめる

V 使用テキスト・教材等

テキストは使用しない。学習文献を提示する。

VI 参考書・参考資料

「発達の扉(上)」 「不思議現象 子ども心と教育」他

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100			60	20	20	
発達と変化の指標への理解			○	○	○	
考察力とグループ検討力			○	○	○	
発達支援の重要性を理解する			○	○	○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

提示された文献を事前に学習し、発表の準備をする。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

主体的な授業参加態度が求められる。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
学 校 教 育 社 会 学 特 論		2	保	2	前浦律子

I 主題

この授業では、幼稚園教育の歴史や現状を捉え、それに伴って発生する今日的課題について追究し、専門性を高めることを目標とする。

II 授業の到達目標

1. 幼稚園教育の歴史の変遷を理解することができる。
2. 幼稚園教育要領の変遷を通して、日本の幼児教育思想を理解する。
3. 幼稚園教育の現状を捉え、今日的課題を吟味することができる。

III 授業の概要

幼稚園教育の歴史の変遷を捉えるとともに、社会の変化に伴って発生する今日的課題を追究する。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. ガイダンス	授業内容の概略と計画
2. 幼稚園教育の制度と歴史（1）	戦前の幼稚園の位置
3. 幼稚園教育の制度と歴史（2）	戦後の幼稚園の位置
4. 幼稚園教育要領の変遷（1）	教育内容と方法論の観点から
5. 幼稚園教育要領の変遷（2）	幼児教育思想の観点から
6. 幼稚園教育の現状と課題（1）	第3の教育改革
7. 幼稚園教育の現状と課題（2）	子ども子育て3法案について
8. 子どもの発達と遊びについて	3歳・4歳・5歳児の特性
9. 協同性について	協同的な遊び（学び）について
10. 幼保一元化・一体化について	安東幼保園の理念と経営
11. 教育課程の編成について	安東幼保園の教育課程
12. 就学前教育について	幼・保・小の接続・連携について
13. 地域社会との連携について	幼稚園の役割拡大について
14. 特別支援教育について	根拠あるアセスメントについて
15. 教員の免許更新制度について	免許更新の意義と背景について

V 使用テキスト・教材等

資料は、必要に応じて配布する。

VI 参考書・参考資料

- ・『日本の幼児教育思想と倉橋惣三』 諏訪義英著 新読書社
- ・『幼児期から児童期への教育』 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
ひかりのくに株式会社
- ・『幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷』 民秋 言編 萌文書林

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
	配点比率(%) 合計 100			70	20	10
幼稚園教育の歴史			○	○	○	
幼稚園教育要領の変遷			○	○	○	
子どもの発達と遊び			○	○	○	
今日的課題			○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

・個人の問題意識をもって、講義に参加すること。・参考文献は、自主的に読んでおくこと

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

発表をもとに授業を進めるので、担当箇所については資料を作成し責任を持つこと。

授業科目名	単位数		学科	年次	担当教員
	必修	選択			
保育内容研究 (健康)		2	保	1・2	鈴木雅裕

I 主題

領域「健康」の内容を理解し、保育内容の実践力を高める。

II 授業の到達目標

1. 領域「健康」のねらい・内容を理解し、乳幼児の健康的な生活を支援できる。
2. 乳幼児の身体発達について学び、健全な身体発達を促すことができる。
3. 園における諸活動を保護者に理解してもらうための「園だより」を作成できる。

III 授業の概要

領域「健康」に関わる内容を学び、園だよりの作成を通して実践方法を学ぶ。

IV 授業計画と内容

項目	内容
1. 領域「健康」とは	領域「健康」の内容
2. 領域「健康」のねらいと内容 1	幼稚園教育要領
3. 領域「健康」のねらいと内容 2	保育所保育指針
4. 乳幼児期の身体発達 1	身体発育
5. 乳幼児期の身体発達 2	機能発達
6. 基本的生活習慣 1	基本的生活習慣確立の意義
7. 基本的生活習慣 2	基本的生活習慣の内容
8. 健康管理	健康観察、健康相談、感染症予防
9. 安全教育 1	園内の事故と危険防止
10. 安全教育 2	交通安全および防犯対策
11. 安全教育 3	自然災害への対応
12. 園だより 1	園だよりの作成
13. 園だより 2	園だよりの作成
14. 園だより 3	園だよりの作成
15. まとめ	まとめ

V 使用テキスト・教材等

必要に応じてプリントを配布する。

VI 参考書・参考資料

菊池秀範・石井美晴(編著)「新訂 子どもと健康」萌文書林

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100		40	15		45	
基本的生活習慣の意義・内容の理解		○	○			
乳幼児における身体発達の理解		○	○			
安全教育の内容の理解		○	○			
園だよりの作成		○	○		○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

保育者として、自らの基本的生活習慣を見直すことに取り組むこと。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

グループでの活動を行うので、活動に支障がないよう出欠席には注意すること。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 内 容 研 究 (人間関係)		2	保	2	岡村由紀子

I 主題

この授業では、人間関係論そのものを深め、高い専門性が身につくことを目標とする。

II 授業の到達目標

- 1、『乳幼児からの人と関わる力』の発達を理解し、人間関係を深める。
- 2、「気になる」子、が虐待など様々な子どもの人間関係を学び、考察する。
- 3、さらに、ニーズの理解、問題の整理、保育実践力を身につける。

III 授業の概要

この授業は、複雑化・多様化している人間関係の本質・課題・応用を学ぶ。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 人間関係とは何か	人類の誕生から学ぶ
2. 人間関係とは何か	歴史から学ぶ
3. 関わる力とは何か	チンパンジーの子育てから学ぶ
4. 関わる力を育てる意味	人間が生きることと関わって考察
5. 年齢別人間関係力の育ち-1	乳児期
6. 年齢別人間関係力の育ち-2	幼児期
7. 特別なニーズを持つ子ども達-1	障害を持つ子どものニーズ
8. 特別なニーズを持つ子ども達-2	虐待される子ども達のニーズ
9. 人間関係と想像性	想像性の発達
10. 大人の人間関係-1	親子の人間関係
11. 大人の人間関係-2	保育者の人間関係
12. 大人の人間関係-3	父母・保育者・地域の人間関係
13. 施設見学	
14. 施設見学	
15. まとめ	

V 使用テキスト・教材等

テキストは、使用しない。毎回プリントを配布する。

VI 参考書・参考資料

「保育内容・人間関係」 金田利子・齋藤政子編著 同文書院

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100		50	30	10	10	
人間関係の本質的理解、発達の理解		○		○		
特別なニーズの理解、問題整理力		○	○	○		
応用力、保育実践力		○	○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

- ・日頃、新聞・テレビなどを通して現在に生きる『子ども達の姿』を捉え、まとめ、発表をする。
- ・次回授業のプリントを読み要旨をまとめ、自分なりに考察をして意見をまとめたプリントを作成し、当日の授業前に提出する

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

毎回授業後、小レポート提出

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 内 容 研 究 (ことば)		2	保	1	小野田貴夫

I 主題

保育のための言葉を取り巻く環境と言葉が生ま出す環境について考察する。

II 授業の到達目標

1. 言葉の発達過程とそれに応じたコミュニケーション方法を理解する
2. 言葉の発達段階に応じた保育環境の在り方を理解する
3. 言葉を主とする遊び方・楽しみ方の実施計画が立てられるようになる

III 授業の概要

言葉の発達に応じた保育環境について計画・調整できるようになるための知識を、様々な場面や操作対象を取り上げながら、身につけていく。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 乳幼児期のコミュニケーション様式	母子関係、愛着、共同注視について
2. 言語発達の過程と対人関係	言葉の発達と家族・社会関係の変容
3. 言語発達の土台作り	保育者の関わり・コミュニケーション環境
4. イメージの生成と言葉	言葉によるイメージ生成の仕組み
5. 言葉と遊び	言葉で「楽しみ」を生み出す場面・方法
6. 絵本と言葉	絵、言葉、歌による絵本コミュニケーション
7. 歌と言葉	歌の中の言葉・歌によるコミュニケーション
8. 映像・絵画と言葉	絵画表現の発達と言葉の関係
9. 文字の習得	文字に対する意識の変化
10. 言語発達の個人差	自己表出志向と指示表出志向
11. 言語発達と性差	性差による言語表現の傾向の差異
12. 心身の障害と言葉	障害に応じたコミュニケーション
13. 聴覚障害・視覚障害と言葉	手話・点字について
14. 発達障害と言葉	共同注意と言語習得について
15. まとめ	

V 使用テキスト・教材等

資料を配布する

VI 参考書・参考資料

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%)	合計 100		25	25	25	25
言語の発達過程と環境の調整についての理解		○	○		○	
言葉による遊び・楽しみの場面の計画			○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

各回に配布する資料の再読と課題の実施。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

私語は慎むこと。積極的に発言すること。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 内 容 研 究 (音楽表現)		[2]	保	2	望月たけ美

I 主題

この授業では、幼児の音楽表現活動を広げていく為に必要な知識と技術の習得を目指す。

II 授業の到達目標

1. 保育者に必要な音楽の基礎知識と基礎技能を習得し、現場で応用できるようにする。
2. 幼児の音楽表現活動の援助の仕方、指導法や留意点を、実践しながら考察する。
3. 保育者自身の音楽的能力や表現力を向上させ、音楽的感性を磨く。

III 授業の概要

授業は、2年次後期の半期で行う。現場に向けての直前対策として、講義やグループによる演習形式で行う。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 目標をたてる/芸術と人間	自分が克服したい課題を明らかにする
2. 幼児音楽教育の流れ	明治・大正・昭和・戦後までの流れをたどる
3. 保育者の音楽的基礎知識の確認	楽譜の中身を正確に知ろう
4. キーボード・ハーモニー	和音の決定と伴奏型の選択法を学ぶ
5. 日本の伝統的な遊びと音楽	日本のリズムや日本の音階について 伝承遊び、わらべ歌の意義を考える
6. リズム創作法	10パターンのリズムの特性を考察する
7. 歌唱法	姿勢・呼吸・発声を学び、表現法を知る
8. 伴奏法①	幼児の歌唱や合奏における効果的な伴奏を検証する。
9. 楽器奏法①	楽器の分類と奏法の工夫、指導法を学ぶ
10. 楽器奏法②	アンサンブルを通して音楽的な奏法を学ぶ
11. 伴奏法②	鍵盤楽器の効果的な取り入れ方を知る
12. 作曲法	創作絵かき歌の作成を試みる
13. 編曲法	現場に必要な編曲の知識を学ぶ
14. 創作音楽劇①	テーマをもとに、台本や音作りを試みる
15. 創作音楽劇②	音楽劇の実演およびディスカッション
定期試験	筆記試験、課題提出、音楽表現の3つの項目で行う

V 使用テキスト・教材等

必要に応じてプリントを配布(配布物を保存していくファイルの準備。常に持参する事)

VI 参考書・参考資料

- 「実践しながら学ぶ子供の音楽表現」(石井玲子:編著 保育出版社) ●「授業のための日本の音楽・世界の音楽」(島崎篤子・加藤富美子著:音楽之友社) ●「子どものための音楽」(オルフ) 他

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	提出課題	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100		50	15	15	20	
音楽の基礎知識と基礎技能の習得		○	○			
幼児の音楽表現活動の考察				○		
技術の応用		○	○	○		

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

授業で学んだことを、実生活の中で意識的に実践してほしい。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

グループでの演習が多いため、欠席する場合はできるだけ早めに伝えるようにすること。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 内 容 研 究 (造形表現)		(2)	保	2	堀 則雄

I 主題

この授業では、子どもの造形表現活動の基礎的・基本的なことがらを再確認しながら、子どもの造形表現についての研究を深める。

II 授業の到達目標

1. 保育者として必要な、総合的造形表現の知識・技能を習得することができる。
2. 子どもの興味関心と表現意欲を高める素材や活動について、理解を深める。
3. 表現に込められた思いや願いを、子どもの視点で、受け止めることができる。

III 授業の概要

演習をとおり、保育者として必要な幼児造形表現活動の知識・技能について学ぶ。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 前期オリエンテーション	前期授業の内容説明
2～4. 平面造形の研究 1	子どもの興味と表現技法
5～7. 平面造形の研究 2	身近にある素材と造形遊び
8～10. 平面造形の研究 3	幼児の造形制作過程の理解
11～12. 造形遊びの演習 1	素材を生かした遊びと工夫
13～14. 造形遊びの演習 2	附属幼稚園とのセッション
15. 造形遊びの演習 3	1～3
16. 後期オリエンテーション	後期授業の内容説明
17～20. 素材と自然で遊ぶ造形活動 1	フィールドワーク
21～22. 素材と自然で遊ぶ造形活動 2	素材を生かした造形遊び
23～24. 身近にある自然と造形活動 3	素材を生かした造形制作
25～26. 共同制作 1	表現活動とコミュニケーション
27～29. 共同制作 2	共同制作のよさの理解
30. 作品発表と授業のまとめ	作品鑑賞と授業のまとめ

V 使用テキスト・教材等

テキストは使用しない。(必要な資料は配布する。)

VI 参考書・参考資料

幼稚園教育要領、保育所保育指針。

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他()
配点比率(%)	合計 100		30	30	40	
総合的造形表現の知識や技能の習得			○	○	○	
表現意欲を高める素材や活動の理解			○	○	○	
子どもの造形活動の理解を深める			○	○	○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

各授業のまとめをし、レポート提出に備えておく。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

指示された表現用具・材料は各自で準備する。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 学 方 法 論		4	保	1	鈴木久美子、前浦律子

I 主題

この授業では、保育研究のための方法論について学ぶ。

II 授業の到達目標

1. 実際の保育場面をもとに、エピソード記述を行い、子どもの行為の意味や保育者の思いについて深く考察できるようになる。
2. 調査研究の基本的な方法を理解し、実践することができる。
3. さらに、上記の方法論を利用して、論文作成につなげることができる。

III 授業の概要

前期は観察法及びエピソード記述、後記は調査票調査を実施する。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1～2. 保育研究とはなにか 観察法の意義について	「保育を研究する」ということの意味を考える
3～5. エピソード記述とはなにか	エピソード記述の目的と書き方を学ぶ
6～8. 個の観察	保育場面において、子どもを観察する
9～11. 観察をもとにエピソード記述を行う	各自がエピソード記述を行う
12～14. エピソード記述の考察	全体で読み合い、討議を行う
15. エピソード記述集の作成	エピソード記述集を作成する
16. 調査の種類と方法	調査の種類と方法を学ぶ
17. 調査レポートについて	調査レポートの書き方を学ぶ
18～19. 調査の企画	どのような調査を実施するか企画する
20～22. 調査票の作成	調査票を作成する
23～26. 調査の実施とデータ分析	調査を実施し、収集したデータを分析する
27～29. レポートの作成	調査レポートを作成する
30. 調査結果の報告 定期試験	調査結果報告会を実施する レポート

V 使用テキスト・教材等

『エピソード記述で保育を描く』鯨岡峻・鯨岡和子、ミネルヴァ書房

VI 参考書・参考資料

授業内に適宜、紹介する。

VII 成績評価方法及び基準

成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
学習項目					
配点比率(%) 合計 100	50	10	30	10	
エピソード記述についての理解と考察	○	○	○	○	
調査方法についての理解と考察	○	○	○	○	
エピソード記述・調査票の完成度			○	○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

前期はエピソード記述を書き集めること。後期は計画に従って、調査票調査を実施すること。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

論文に直接つながる学習である。授業時間外の学習がきわめて重要になる。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 臨 床 学 特 論		2	保	1	岡村由紀子

I 主題

この授業では、現代社会の子どもの発達を保障し、人格形成の土台を創る保育創造の高い専門性が身につくことを目標とする。

II 授業の到達目標

1. 子どもを取り巻く状況を歴史的・社会的・文化的に考察する。
2. 保育場面における子どもの表れを「自我形成の発達」に視点にあて学ぶ。
3. その上で幼児期から思春期を見通した保育の理論を理解し、実践力を身に付ける

III 授業の概要

この授業は、現在の保育場面における、課題や問題に焦点をあて、問題整理力と保育創造力のための専門性を学ぶ。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 育ってきた時代を振り返る	戦後の歴史を中心にする。
2. 子どもの中に見る社会	子どもの表れと社会の動きの比較。
3. あそび文化を通してみる子ども	あそびの歴史を中心にする。
4. あそびの意義	発達の視点から考察する。
5. あそびの構造	保育構造の中で捉える。
6. 自我形成の発達と保育	発達とは何かを中心にして学ぶ。
7. 自我形成－1	乳児期〔0－2歳児〕
8. 自我形成－2	幼児期〔3－5歳児〕
9. 自律的自己コントロール形成と保育	自己主張期・集団に働きかけ期
10. 自律的自己コントロール形成と保育	自己コントロール期
11. 気になる子を含む個と集団－1	個と集団の発達の比較
12. 気になる子を含む個と集団－2	実践の実際と指導について深める。
13. 施設見学	
14. 施設見学	
15. 「求められる保育」について	発表・討議

V 使用テキスト・教材等

岡村由紀子・金田利子共著「4歳児の自我形成と保育」ひとなる書房

VI 参考書・参考資料

発達支援グループまほろば「ちょっと気になる子の保育」ひだまり出版

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100		50	20	20	10	
保育現場の課題や問題を理解		○	○			
様々な問題を整理し課題を生み出す			○	○		
応用力、保育実践力		○	○	○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

- ・ 日頃、新聞・テレビなどを通して現在に生きる『子ども達の姿』を捉え、まとめ、発表をする。
- ・ 授業の中で出る様々な他者の意見や保育実践の理論がどこにあるのかを授業後、自分なり考え、まとめる。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

毎回授業後、小レポート提出

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
臨 床 心 理 学 特 論		2	保	1	里村澄子

I 主題

この授業では、臨床心理に関する知識を元に心の有り様を理解する方法を学ぶ。

II 授業の到達目標

1. 臨床心理の知識を理解し、自分の心の動きが観察できるようにする。
2. 関わりながら他者を理解する姿勢を体得し、そのためのコミュニケーション能力を高める。
3. 心理臨床で培った知見をもとに、問題を抱えた人の理解・支援に応用できるようにする。

III 授業の概要

心理臨床に関連する様々な事例等を通して、各人の考察をもとに理解を深める。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1. 臨床心理学を学ぶ目的について	「床に臨む心理」について考える
2. 心理臨床の課題と研究方法	関与しながら観察する心理臨床
3. カウンセリングと傾聴	カウンセリング・マインドについて
4. ロージャズの人間観	相互尊重の精神のもつ意味
5. 心の発達と心理臨床	発達課題とその節目について
6. パーソナリティーの発達	育児環境と心の発達
7. 性格に関する理論的背景について	性格の構造、性格論
8. 自分の性格について考える	性格検査の実施（自己理解）
9. 適応について	心の働きと適応機制
10. 不適応と適応障害	サインとしての問題行動
11. 問題行動の捉え方	治療的接近と行動変容への援助
12. 個人への心理援助について	認知行動療法の理論と解説
13. 事例からみる心理援助	事例Aを通して考える援助
14. 集団参加の視点からの心理支援	社会化への援助のあり方について
15. 家族への支援について	支援への連携と個人情報
定期試験	筆記試験

V 使用テキスト・教材等

『臨床心理学』保育出版社 小林芳郎編著

VI 参考書・参考資料

『カウンセリングを考える』創元社 河合隼雄

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法				
	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%) 合計 100	50	20	10	20	
臨床心理の理論理解	○	○		○	
事例による自己観察・他者理解の発表		○	○		
心理支援への応用、実践			○	○	

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

テキストのI章を事前に読んでおくこと。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

授業に関係のない私語はしないこと。基本的にレポート提出をもって授業参加とする。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 研 究 実 習	(4)		保	1	永倉みゆき

I 主題

この授業では1年間にわたり常葉大学短期大学部附属たちばな幼稚園、とこは幼稚園両園において研究実習を行う。その中で幼児教育専門職としての職務追行能力を養成しつつ、研究的態度をもって保育を行っていく。

II 授業の到達目標

1. 自分なりの視点を持って保育に参加することができる。
2. 研究的立場から保育を考える態度を持つことができる。
3. 実習したことを、考察し、記録にまとめることができる。

III 授業の概要

実習に当たっては事前・事後指導を行い、附属園ときめ細かい打ち合わせをしつつ園の実情に即した形で進めていく。

IV 授業計画と内容

- 実習事前指導 ※これらを1年の園の保育の流れに合わせた形で進めていく。
- 日常の保育場面における実習
- 行事への参加における実習 実習期間は平成25年4月～平成26年2月(毎週 火曜日)
- 研究保育に向けた実習

尚、前期実習終了後に「中間発表会」後期終了後に「最終報告発表会」を行う

V 使用テキスト・教材等

特になし。

VI 参考書・参考資料

授業内で必要に応じて指示する。図書館の資料をおおいに活用したい。

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法				
	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他(記録等)
配点比率(%) 合計 100				50	50
目的を持って実習に参加する態度				○	○
保育を省察する態度				○	○
保育の要点を記録する技術				○	○

※ 受講状況と、幼稚園からの評価を総合的に判断し評価する。

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

自分の研究テーマを活かして実習日誌を書くこと。
実習日誌は、期日内に必ず提出すること。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

各園の先生方と密に連絡してすすめること。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
専 門 ゼ ミ ナ ー ル		(1)	保	1	保育科専任教員

I 主題

この授業は、自らの研究テーマを見つめ、2年次の修了論文作成につなげていくことを目的としたものである。各自の興味・関心と重なる教員のゼミナールに所属し、個別に指導を仰ぎながら、自分の研究テーマを学び、深めていく。

II 授業の到達目標

1. 自らの研究テーマを持ち、研究に取り組むことができる。
2. 研究テーマに沿った書籍、論文等の資料収集と購読ができる。
3. 計画を立て、見通しを持って論文作成にあたる。

III 授業の概要

学生自身の選択、教員の認定により所属ゼミナールを決定した後、各教員と進め方を相談しながら以下の順で論文作成に向かう

IV 授業計画と内容

- ① 実習・授業その他の経験の整理から自分が興味や関心を抱けるテーマを絞っていく。
 - ② 仮テーマの決定
 - ③ テーマに関する文献等を読み関心を絞り込んでいく
 - ④ 論文作成に必要なアンケートや観察等の計画を立てる
- ※ ①は全体で行う
②～④は担当教員と相談しながらこのような過程を辿って進めていく。

V 使用テキスト・教材等

各教員と相談し、必要なものを用意する。

VI 参考書・参考資料**VII 成績評価の方法及び基準**

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況 授業態度	その他 (資料収集)
配点比率(%) 合計 100				50		50
自らの興味関心を活かしたテーマ設定ができたか				○		○
文献、論文等の資料の収集と購読ができたか				○		○
計画的な研究の遂行ができたか				○		○

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

各自の計画に沿って自主的に課題に取り組むこと。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

自分の研究なので、自ら進んで調べるような態度で臨むこと

授 業 科 目 名	単 位 数		学 科	年 次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 特 別 研 究 I	(2)		保	1	鈴木久美子

I 主題

この授業は、段階的に修了論文作成に向かっていくために、「論文を書くこと」を学ぶものである。

II 授業の到達目標

1. 研究とはなにかを理解し、2年間の研究計画をたてることができる。
2. 論文作成に必要な知識を学び、その方法論を理解することができる。
3. さらに、上記を理解することで、具体的な論文作成につなげることができる。

III 授業の概要

論文を書くことを最終目的に掲げ、そのプロセスを段階的にたどって学ぶ。

IV 授業計画と内容

項 目	内 容
1 修了論文とはなにか	修了論文の位置づけと要件を知る
2 論文を書くとはどういうことか	論文を書くことの意味、進め方を知る
3 研究とはなにか	研究の進め方を知る
4～5 文献研究方法について	文献の集め方、読み方を学ぶ
6～8 文献購読①	レジュメの作り方、発表の仕方を学ぶ
9～13 文献購読②	テキストクリティークを行う
14～18 フィールドワークについて	フィールド調査を行い、成果を発表する
19～20 議論のしかた	議論のしかたを学ぶ
21～23 調査研究方法について	様々な調査方法を学ぶ
24～25 論文の書き方	論文の書き方を学ぶ
26 修了論文の書き方	修了論文の具体的な書き進め方を学ぶ
27～29 研究計画書の作成	研究計画書を作成する
30 研究テーマの発表 定期試験	研究テーマを発表する レポート

V 使用テキスト・教材等

『よくわかる卒論の書き方』白井利明ほか、ミネルヴァ書房

VI 参考書・参考資料

授業内に適宜、紹介する。

IV 成績評価方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%)	合計 100	60	10	20	10	
研究方法についての理解		○	○	○	○	
論文作成についての理解		○	○	○	○	
レジュメの作成、発表				○	○	

VIII 授業時間外の学習(予習・復習等)

テキストを事前に読んで、レジュメを作成すること。テーマ毎に与えられた課題に取り組むこと。

IX その他(履修上の注意、前提条件等)

修了論文作成は、1年次から始まっている。そのことをしっかり自覚してほしい。

授 業 科 目 名	単 位 数		学科	年次	担 当 教 員
	必修	選択			
保 育 特 別 研 究 II	(2)		保	2	保育科専任教員

I 主題

1 年次、専門ゼミナールで取り組んできた成果を活かし、修了論文を作成する。教員と相談しながら研究方法を決め、文献収集を行い、データを分析し、論文にまとめあげて到達目標とする。

II 授業の到達目標

1. 自分のテーマに沿った研究方法で研究を進める。
2. 集めたデータをまとめて分析する。
3. 自分の研究した内容について説明ができる。

III 授業の概要

それぞれの担当教員と相談しつつ、計画的に自らのテーマに沿って論文を作成する。

IV 授業計画と内容

テーマ	教員	
保育学・教育学関係	永倉みゆき 竹石聖子	前浦律子
心理学関係	土屋廣人	
社会福祉関係	鈴木久美子	
表現関係	加藤明代	河原田潤
運動・健康関係	鈴木雅裕	遠藤知里

V 使用テキスト・教材等

各自のテーマに即して、担当教員と相談して選定する。

VI 参考書・参考資料

各自のテーマに即して、担当教員と相談して選定する。

VII 成績評価の方法及び基準

学習項目	成績評価方法	試験	小テスト・レポート	成果発表・作品	出席状況・授業態度	その他 ()
配点比率(%)	合計 100			100		
	自己課題を明確に表現した論文作成			○		
	データ収集の方法の妥当性			○		
	プレゼンでの表現の仕方			○		

VIII 授業時間外の学習（予習・復習等）

自分の研究計画に従って、自主的に進めていく。

IX その他（履修上の注意、前提条件等）

途中経過をきちんと担当教員に報告すること。

※評価に関する補足：担当教員の論文審査に加え、修了論文発表会の様子等も加味して総合的に評価する。